



「人工衛星騒動の中に潜む恐ろしさ」 日本キリスト教団津久見教会 野口春夫

(はじめに)

朝鮮民主主義人民共和国が4月4日～8日の11時～16時の間に「人工衛星を打ち上げる」と予告した時から、打ち上げ後の4月半ば過ぎまでの日本国内の「大騒ぎ」は異常と言える。だが「騒ぎ過ぎ」という言葉だけで見過ごしてはいけないことである。何故なら、ある人々(自衛隊を海外に派兵して、武器を自由に使つて戦闘出来るように持つて行きたいという人々)は秘かな目的を持つているように思えるからだ。それはソマリア沖に「海賊対策(退治?)」(浦島太郎)の航空機、船舶の航行安全に必要なる(まいに)の名目で自衛隊を送り出したことの秘かな目的とも連動している。この事を今回の騒動から明らかにして、9条を守り、平和を求め宗教者の行くべき道を探りたい。

朝鮮民主主義人民共和国は打ち上げを前に、国際的ルールに従つて「国際海事機関(IMO)」とか「国際民間機関(ICAO)」にロケットが落ちる可能性があるのは、秋田県沖約130キロから180キロ(公海上)の帯状の海域であることを示し、打ち上り予定期間中(4日～8日)の航行安全に必要なる(まいに)の名目で自衛隊を送り出したことの秘かな目的とも連動している。この事を今回の騒動から明らかにして、9条を守り、平和を求め宗教者の行くべき道を探りたい。

アメリカ(合衆国)海軍が横須賀基地所属の「ジョン・S・マケイン」と真珠湾を母港とする「チェイファイ」というイージス駆逐艦を太平洋や日本海に派遣すると、韓国もイージス艦「世宗大王」を派遣、平和憲法を持つはずの日本は、イージス艦「こんこう」と「ちようよう」を日本海に、イージス艦「きりしま」を太平洋に派遣した。まさに「臨戦態勢」である。日本の高いと翔体を追ってイージス艦隊を太平洋に派遣することは、日・韓・

日本国憲法 第9条

世間を支配する大きな声
それに押しつぶされる
叫びを聞く耳・眼

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

米合同の「臨時三国軍事演習」をしているのである。普段、費用が高くて(兵器はなんでもそうだが)、あまり実射する機会がない兵器(SM3とPAC3)の2種類の兵器の実験(実射)を計画したのであるかと思う。

危機意識を煽る

自民党は小沢民主党代表(当時)の公設第1秘書大久保隆則氏の、政治資金規正法違反の罪での逮捕、そして起訴(3月24日)。自民党麻生派の議員は「危機管理に成功すれば支持率がある、不謹慎な表現だが『神風だ』と発言したと報道された。首相官邸からすべての都道府県、市町村に一齐に送信される情報ネット「エムネット」は全国でまだ7割しか整備されていないにもかかわらず、これを利用して情報を全国の自治体に送る「実験」(実戦?)をした。秋田県で

は、25の市町村の内、まだ「エムネット」が整備されていない所が24もあるというのに、4月4日（人工衛星発射の最初の予定日）までに政府が（国の金で）整備したという。岩手県では35の市町村の内、整備されていない18市町村全部に（国の金で）整備したという。なんと「戦争を煽る」手回しによさであろう！この騒動のために、他の多くの自治体が不要な費用（臨時の整備費用）を出させられたに違いない。エムネットを「稼働して」朝鮮民主主義人民共和国のロケット発射情報が4月4日流された。だが滑稽なことに「誤報」であった。大分県は当日「誤報も」（誤報）「訂正の報」も受信出来なかった自治体の一つである。その理由を（大分県は）「あまりにも緊迫していたので受信できなかった」と説明した。この説明は至極名言である。それほどに、政府は日本の自治体

を「戦争騒動」に巻き込んだのであった。各自治体の、政府の誤報による物的、人的被害は甚大なものであったようだ。この騒動の犠牲者は自治体（都道府県、市町村）である。政府はすぐさま「誤報」を流した責任者の「処罰を検討する」と言ったが、これも選挙の票目当てのジェスチャーであろうし、裏で一部の人々は「戦時非常時体制」への訓練が出来た、とほくそ笑んでいるにちがいない。

自衛隊は自民党支持率向上に寄与するための手強い作業をしながら、一方では、自衛隊自身の「訓練」、特に最新兵器SMSとPAC3の実射をしたくてたまらないのであった。日本の弾頭ミサイル防衛システム(BMD)下においては、大気圏外高度500キロ以下で迎撃するSMS、それが失敗した時（撃ち落とせなかった時）用に高度10数キロで大気圏に再突入した物体を

PAC3で迎撃する態勢まで組んだ。それは海上自衛隊が過去2回のSMSの試射で1回失敗し、米国海軍は過去6年間で15回の試射をして12回成功したという日米の差を縮めたいという自衛隊の「あせり」も見える。航空自衛隊は昨年米国で試射に成功しているというが・・・SMSやPAC3は費用がかかりすぎるので、そんなに多くの実射訓練は出来ないのが現状であり、この千載一遇の機会（飛翔隊騒動）を逃してなるものか、是非とも実射しようと、国内駐屯地、首都東京、日本海、太平洋の海と空に、実射態勢をとった。大げさに危機を煽りながら、（自衛隊は）国民の皆さんを守っています、と言いたいのである。その例が、お花見の時に、陸上自衛隊の駐屯地で例年行っている花見客への敷地開放の打ち切りや中止である。大分県の玖珠駐屯地の開放（いつもは1000人以上が400本の桜を目当てに訪れるそうだが）「もしものことがあるといけないので（？）」と4月2日で打ち切った。8日間もカットしたのである。佐賀県の目達原駐屯地（ここにもロケットが来るの？）では、毎年地元の名人を集めて行うお花見「観桜会」を中止したという。この様な差別的な「観桜会」は永久に止めた方がいいが、「戦争を煽る」ためのものだというのは見え見えである。飛翔体のコースから4千キロ近くも離れた九州でも、こんなにしてまで危機を煽っていた。

眼を転じてみれば

韓国ジャーナリストが言う「戦争が迫っているかのよう」に・・・。アメリカのジャーナリストは「政治家は選挙前で、国を守っているところを見せたいのだから、バランスにかけ、パフォーマンスに負けたい・・・」という。どちらも駐日特派員の声であるが、私たちは真摯に聴くべきだ。「守るのは何か」といえば、私はこう考える。ロケット（ミサイル？）発射の日（4月5日）の新聞を見よう。沖縄県では少なくとも3件、米軍人が引き起こした事件が（朝日新聞に）報道された。1. 那覇では米軍関係者の車（Yナンバー）によるひき逃げ事件、男女ふたりは重傷、一人は股関節にひびがはいる怪物。2. 同じく那覇市内の飲食店では、米軍伍長が客の女性（日本人）が席を離れたスキに1万9千円入りのハンドバッグを「置き引きした」という。幸い追いかけた店員が捕まえたから良かったものの、伍長がもし銃や刃物で店員に抵抗していたら、店員の命は危なかったであろう。3. 沖縄市では、二人組の白人がバーで二セ20ドル札を2枚使って逃げたという。この日、

沖縄県だけでもこんなに多くの米軍人による被害が出ている。朝鮮民主主義人民共和国発射の飛翔体では、日本では誰も怪我などしなかった。

中国は「朝鮮民主主義共和国にも宇宙を使う権利はある」と冷静であり、米国は「慎重に見てみよう」とか言う中で、自民党と公明党だけが「もっと朝鮮民主主義人民共和国に制裁を」と声高に叫んでいた。

核保有国への夢

この様なことが起こると必ず「突出した意見」が保守側から出される。それは①「敵基地攻撃能力」と②「核保有論（日本の核武装論）である。①については「日本独自で北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の基地を攻撃出来る能力について議論したい」（山本一太自民党参議院議員）、②については「日本も核を持つ

という脅しぐらいかけないといけない」（自民党坂本剛二組織本部長）どちらも4月7日（火）の新聞に報道された。①については既に2004年

石破茂（当時防衛庁長官↓後防衛大臣、クリスチャン？）の命令で検討がなされている。それらの「極端な」意見については浜田防衛大臣は否定するが、国民をそう言った議論に慣れさせ、そのように世論を持つて行こうとしている。いつもの自民党・公明党のやり方である。

結論的には、平和を求める真の国民は宗教者であれ、そうでなくとも、「オオカミが来たぞ！」の一連の騒動に惑わされることなく、「イラク自衛隊派遣は憲法違反である」と明確に示した。名古屋高等裁判所の判決などを「てこ」に、騒動に騙されないで平和憲法を守る行動をいろいろ起こすべきである。同時に日本がここまで「軍事力」「戦

時体制」を備えているのか（兵器、警戒システムなど）を知り、戦争政策への批判に少しでも加わるべきであろう。宗教者の任務は重いがやりがいがある。

（4月のロケット発射に続き5月25日「地下核実験」をした。2006年10月9日の第1回に続くものである。その件について）

またぞろ、一斉に「朝鮮民主主義人民共和国バッシング」が起った。何故か「拉致被害者家族連絡会」なるものが一番出てきて非難する。「北へもつと制裁を」と叫ぶ。新聞の別の面を見てみよう。福岡のアジア美術館で5月28日から「第5福竜丸」展覧会が、福岡市で）始まった事が報道されている。1954年3月1日、太平洋ビキニ環礁近くで、日本の多くのマゲロ漁船（1千隻位操業していた）がアメリカの水素爆弾実験で「死の灰」を浴び、第5福

竜丸（静岡）の無線技師久保山愛吉さんが半年後に急性放射能症で亡くなった事件である。この展覧会は核廃絶を願う、平和を求めているものなのだ。私たちは「朝鮮民主主義人民共和国バッシング」に組みするべきではない。真の核廃絶を願っている人々と共に、アメリカの未臨界（臨界前）核実験にも、ロシア連邦のそれも含めて、あらゆる核実験、核開発に反対し、核兵器を全てなくしていく展望をもって、平和（9条の守ることも含め）を前進させるべきである。麻生首相の談話の

行き着くところは、「日本も核兵器を持つ」とか「日本が朝鮮民主主義人民共和国を攻撃する準備をしよう」しかない。私たちは、本当の平和を求める人々と手をつなぐべきであろう。そして先に述べた「第5福竜丸」事件関係の展覧会開催などの平和活動を行うべきだ。この頃「西松建

設事件」での、自民党「階大臣の問題は、検察が献金した側を起訴しないと決定した、二階側については引き続き捜査を続けると報じられた。二階大臣は「資料がないで分かるない」の1点張りである。元警察関係のお偉いさんが言

明した「西松事件は自民党には及ばない」が証明されて幕引きだ。また、ソマリア沖の海上自衛隊の活動を支援するための「P3C哨戒機」2機が日本を出た（5月28日朝日夕刊）。実任務でP3Cが海外派遣されるのは初めてであるとも書かれている。「潜水艦を発見する」のを主任務とする兵器が何故いるのか？初めは艦船搭載のヘリコプターだけ使うようなことを思わせ、その後こんな航空兵器まで派遣するという。自衛隊の海外での実戦訓練を目論んでいるのは明らかだ。衆議院の解散、総選挙は近いようだ。

人は何故カルトに陥るのか②

真宗大谷派勝福寺住職 藤谷知道

麻原は裁判で「すべては弟子がやったことだ」と言いました。それを聞いた者は、彼一流の言い逃れと、いよいよ怒りを燃やすことになりましたが、はたしてそれは全くのそら言なのでしようか。どう考えても、麻原の力だけであれだけ多くの人間をマインド・コントロールにかけることなど不可能です。やはり、弟子たちの中から、進んでマインド・コントロールにかかっていた部分があるのではないのでしょうか。そのことについて考えてみた一文を載せさせていただきます。

「善」と「悪」のドッキング

■麻原のルサンチマン

麻原が「オウム神仙の会」を立ち上げてから地下鉄サリン事件まで、たった十一年で、わずか十一年で、ヨガによる人間探求の会が、一万余千人を巻き込んだ世界最終戦争（ハルマゲドン）へと変質しております。なぜこんな事になったのだろうか、そのことを明らかにするために、まず麻原とは何者なのかを考えてみる必要があると思えます。

麻原彰晃の本名は松本智津夫といえます。熊本県八代市に、七人兄弟の六番目の子として生まれました。お父さんは豊職人で、家は貧しく借家生活でした。そのうえ先天性

緑内障で、左眼はほとんど見え、右目も〇・二ぐらいの弱視だったそうです。それでお父さんから「両方とも見えな

いことにしろ」と言われて、お金のかからぬ熊本県立盲学校に入れられます。貧しさや眼の障害は世間から捨てられたこととして、盲学校にいれたことは親から捨てられたこととして、智津夫少年には感じられたのではないのでしょうか。コンプレックスとルサンチマン、この二つが松本智津夫の原点になっているように思えます。

彼は盲学校の寄宿舎で七歳から二十歳まで過ごします。そこは、あつてはならぬ事なのですが、世間から差別され隔絶された閉鎖社会だったのではないのでしょうか。自尊心の強く生まれた智津夫少年には耐え難いことだったと思います。その鬱憤を何とか晴らすと、時にはおもねり時には威喝して、先生や同級生に自分を認めてもらおうとして

おります。結局、彼は、もが

けばもがく程みんなから疎まれてしまいました。

彼は演劇が好きで、高等部に進むと自ら脚本を書き、自作自演するようになります。もちろん主役は自分で、ヒロインも自分で決めます。文化祭では、悲劇のヒーローを演じる陶酔した松本智津夫少年があつたと言います。

彼は、盲学校で取った鍼灸師だけでは満足できなかったようです。強烈な自尊心（生きようとする本能の激しさといつてもよい）をもって生まれてきた彼の中には、自分の前に立ちただかった世間に対し、親に対し、そして眼が見えないという障害のある自分の身体に対し、燃え上がるような恨みが渦巻いていたのではないのでしょうか。世間を自分の下に跪かせてやるには何が

いいか、上京した彼は東大を目指して受験勉強を始めます。東大合格、そして政治家になる夢を親しい人に語っています。しかし盲学校の授業では受験の基礎もなかったで

しようし、親の支援もなく、眼も不自由です。そのうえ知子夫人と出会い、結婚、子供も生まれます。また一つ挫折しました。

まともな形では世間に太刀打ちできなくなった彼が始めたのが、「漢方亜細亜堂薬局」です。受験には誤魔化しがききませんでしたが、薬の商売となれば曖昧な部分があります。脚色一つで何とでもなると、麻原には思えたのではないのでしょうか。彼は東洋医学だとか仙道だとかを研究して、怪しい薬を造り、誇大な宣伝をして儲けだしました。

ところが薬事法違反で逮捕されます。また挫折です。

前科者になつてはもうこの世では認められません。続いて彼は、この世の外、つまり宗教の世界に活路を見いだそうとします。決してへこたれない彼の本能が、薬よりもっと曖昧な宗教をかぎつけた、と言つたらいい過ぎでしょうか。

すでに見てきたように、彼

は宗教の世界においてようやく自分を認めさせることに成功しました。松本智津夫あため「麻原彰晃尊師」の誕生です。ところが彼はこれだけではまだ満足できなかつた。「尊師」というのは仲間内だけのこと、世間の全部を自分に跪かせようと、つまり「神聖法皇」になろうとして、ハルマゲドンまで突っ走ってしまいました。眼が見えなくなっていました。麻原にとつては、現実の世界と、盲学校の文化祭で悲劇のヒーローを演じた舞台とが、重なっていたのかも知れませんが。そして獄に繋がれた今も、彼は妄想の中で、磔はりつけになったイエス・キリストに自分自身を重ねているように思えてなりません。

■弟子のルサンチマン

以上、麻原彰晃を通して、「オウム」事件を考えてみました。続いて、弟子たちの側から「オウム」事件を考えて

みたいと思います。それと、いうのも、「オウム」の事件は麻原彰晃が一人で脚本を書き、一人で演出した劇ではないからです。弟子たちはマインドコントロールされた操り人形だったように言われることもありすが、決してそんなことはありません。弟子たちもまた麻原と呼応しながら、ハルマゲドンの物語をつむいでいったのだと思います。もし麻原だけの妄想なら、空想小説で終わっています。麻原彰晃と弟子たちが共鳴しあい次第に増幅していったから、妄想を現実化させてサリンを撒くということができたのです。

はじめに詳しく見てきたように、弟子たちの「オウム」への出家は一応、善意です。ところがその結論は無差別殺人という、極悪でした。出家は入口、事件は出口とするならば、途中でとんでもないものにならってしまったことになりま

す。麻原と弟子たちが共有して

いた物語は、解脱であり人類の救済でありました。その美しい言葉のおかげで、デモニッシュな感情が共鳴しあつたように思います。それは何か、しばらく考えてみたいと思います。

弟子の多くは豊かな時代に育つた子ども達です。彼らを取り巻く大人たち（親や先生やテレビの中から呼びかけてくる大人）は、民主主義の何たるかをよくわきまえていて、子供をとて大切にしている人びとでした。よく勉強し、優しい子であれば、教えてくれるのでした。彼らはそれに応えて「良き者たらん」というエートスを育んだのではないのでしょうか。簡単に言えば、「育ちの良い子供たち」です。それに対し麻原には、身体の障害や貧困に対する恨みがあります。自分を邪魔者扱いした親への不信もあつたと思います。彼はその意味で「育ちの悪い子」であります。

■よい子の故に現世を憎む

育ちの良さと育ちの悪さ、優しさと恨み、ある意味では全く反対のものに見える両者がどこで一つになったのでしょうか。私見を述べさせてもらおうと、良い子であろうとするが故に培ってしまった恨みがあるのだと思います。

親からも社会からも「よい子であれ」と願われて育てられたら、どうなるか。それによつて存在全体がよい子になれるのならないのだが、実は、よい子でなければならぬという意識だけが育つのです。そしてある日、親の優しさをゆりかごにして純粹培養された意識が、突然、牙を剥く。自分に良い子であれと言

い聞かせてきたこの社会こそ虚偽だらけではないかと。否、そればかりではない、いい子と悪い子と区別されてきたが、身体からだの奥深きところから噴出してくるエゴイスチックな自分をどうしたらいいのか。輸血された他人の血がもとのいの

ちを拒絶するように、正義の名で植え付けられた意識が自身の自分や社会を拒絶し始めるのです。ひとことでは言えませんが、良い子は良い子であるが故に、現実社会や自身の自分が許せなくなつたのだと思います。もちろん文句の一つや二つ言つてもビクともしない現実社会であり我が身でありま

■ゲルと弟子との閨取引

井上嘉宏さんは「自分自身を木端微塵に破壊したい」と麻原に訴えています。村井秀夫は、「苦しみに満ちた現世を丸ごと消滅させたい」と呟つぶやいていたと言われています。

それを聞いた部下は村井の中に「澄み切った狂気」を感じたそうです。

普通、自分の奥底に秘められていたデモニツシユな無意識を表に出すことは出来ません。見れば発狂するかもしれないからです。麻原と村井それに新實あたりは、サリンを撒くことも含めてデモニツシユな世界をはつきりと意識化していたようです。(上祐史裕や石川公一らは、麻原らに悪魔を演じさせ、自分はず子の影からこっそり見ていた、そんなふうには思えません)。でも多くの弟子たちは、憎悪を無意識の中に押さえ込んで、自分たちは人類の救済事業をしていると思っていた。そしてグルを疑わずグルに従いますという形で、麻原に自分の憎悪を解き放つてもらっていたのだと思います。弟子はグルに騙されたのではない。弟子がグルを利用した面もあるのです。これがグルと弟子との間にあった、無意識の闇取引の実体でないでしょう。

うか。

ともあれ意識していたかいなかったかの違いはあっても、奥深いところで世間に対して自分に対し憎悪を発酵させていたのです。そしていつの日か現世にピリオドを打とうと思っていたのです。麻原の狂気は村井にもあつたし、村井の狂気は「オウム」にいる人たちがみんなが共有していた狂気でした。それでなければ、教団あげての武装化なんて出来たはずがありません。

このように全く方向が違ったルサンチマン、ある意味では麻原の冷たいルサンチマンと弟子たちの熱いルサンチマンが、サティアンという窓のない閉ざされた空間の中で共鳴し増幅し、ついに爆発してしまいました。

表向きは人類の未来を救うという、彼らに言わせれば「壮大で使命感に溢れた」正義の物語だったわけですね。でも表向きは全部、正義です。その正義の物語を推進していったエネルギーは恐ろしい

いまでの恨み、正義の名によつて抑圧された自然的生命の恨みではなかったのでしょうか。

■ゴキブリを殺さぬ故に サリンを撒けた

今でも残された多くの信者たちが、「ゴキブリさえ殺さぬ私たちがサリンなど撒けはざがない」と言います。「事実、撒いたんだ」と言われると、いかにも育ちの良さそうな荒木浩広報部長などはほとほと困ったような顔になり、「私には分からない深い意味があるはずだ」と思考停止に入ります。

けれども私はこう思います。「ゴキブリを殺さぬが故にサリンがまけたのではないか」。殴ることもしない、ゴキブリを殺すことさえしないというのと、人を殺すということは一見すると反対のことのように見えます。ところがそれは逆で、ゴキブリを殺す者は決して無差別な殺人は

しないのではないか、そう思っています。例えば連合赤軍に、植垣さんという兵士の方がおりました。彼の手記を読んでもみると、その心根の美しさに涙が出てきます。本当に育ちの良い人なんです。そんな人がなぜ人を殺すことになったのか。たぶん頭の中で純粹ということを追求めすぎたために、生身の人間がもつ弱さ、醜さを許せなくなったのではないのでしょうか。

もつて。「オウム」の「ボア」とそつくりの論理です。

私自身も一九七〇年前後に大学に身を置いていましたから、あの時の雰囲気を知っています。「民衆のため」ということが全ての価値基準でした。そこから大学解体とか自己否定という思想も出て来たと思います。ところが「民衆のため」と振りかざした当の本人たちが一番、軽蔑したのは民衆の代表であるはずの自分の親たちだったのです。民衆のためといったら、それなら親を愛せるかというところではない。「民衆のため」ということを言えば言うほど、「わが子かわいさの故に本音をさらけ出す」エゴイステイックな親を軽蔑し憎んでしまったのでした。

さらには「連帯」をうたいながら、共に戦っている友人のちよとした考えの違いや漏れで人間の悲しきエゴを容赦なく指弾してしまい、その一方では、自分の中に蠢いている嘘が他人にバレないか

もつて。「オウム」の「ボア」とそつくりの論理です。私自身も一九七〇年前後に大学に身を置いていましたから、あの時の雰囲気を知っています。「民衆のため」ということが全ての価値基準でした。そこから大学解体とか自己否定という思想も出て来たと思います。ところが「民衆のため」と振りかざした当の本人たちが一番、軽蔑したのは民衆の代表であるはずの自分の親たちだったのです。民衆のためといったら、それなら親を愛せるかというところではない。「民衆のため」ということを言えば言うほど、「わが子かわいさの故に本音をさらけ出す」エゴイステイックな親を軽蔑し憎んでしまったのでした。

もつて。「オウム」の「ボア」とそつくりの論理です。私自身も一九七〇年前後に大学に身を置いていましたから、あの時の雰囲気を知っています。「民衆のため」ということが全ての価値基準でした。そこから大学解体とか自己否定という思想も出て来たと思います。ところが「民衆のため」と振りかざした当の本人たちが一番、軽蔑したのは民衆の代表であるはずの自分の親たちだったのです。民衆のためといったら、それなら親を愛せるかというところではない。「民衆のため」ということを言えば言うほど、「わが子かわいさの故に本音をさらけ出す」エゴイステイックな親を軽蔑し憎んでしまったのでした。

河野義行講演会感想文

と恐れることになる。理性でもって誠実であろうとすればする程、お互いの関係はズタズタに切り裂かれていきました。ゲバ棒で流された血よりも、理性で流された血の方が、人々の魂に深い傷跡を残したのではないでしょうか。それが極度までいくと、連合赤軍になつたり、「オウム」になつたりしたんだと思います。

人間とはゴキブリを殺す存在なのです。罪深い存在なのです。それが人間の事実であり、自然なのです。その事実通りに暮らしていたら、サリンなんか決して撒かない存在なのです。ところが、ゴキブリを殺さぬという不自然さを選んだために、サリンを撒きたくなくなつてしまつたのです。これが人間の意識の闇であり、マジックです。人間とは、実は呪われた存在であるのです。このことをよく知り抜いていたのが、釈尊でありソクラテスであり孔子でありキリストだったのです。

▼ 松本サリン事件の当時の報道を思い出しました。マスコミの誤報をあたかも真実のように受け止めてしまつた自分を恥ずかしく思いました。つらい、悲しい思いを乗り越え、前向きに生きていらつしやる河野さんに感動致しました。

▼ 有意義な講演会感謝しています。河野さんの人間性に絶大な尊敬を申し上げます。

▼ お話をお聞きし、TVかの影響の大きさや、人々の固定観念の恐ろしさなど、考えさせられることのおおい講演会でした。ありがとうございます。

▼ 人間としての品位、思慮深さを感じました。どのような人々の育みでそのようになられたのか。この事件をとおしても培われたものなのだろうなど感じました。あつてはならない事件に遭遇した方々として生き方、あり方を学ばせて頂きました。

▼ 河野さんの書かれた本を読みたいと思いつつ『命あるかぎり』しか読ませていただいていないのですが、元オウムの信者の人との交流が強く心に残っています。今日のお話にもありました。自分をお話しめた相手であつても、そ

のことを憎み続けたり恨んだりすることで自分の人生のもち時間を費やしたくないという思い。同じような立場になつたとき、私がそのように思えるかどうかかわらないでいます。でも河野さんの心の持ち方、やり方参考になりました。直接お話を聞ける機会が思いがけずに訪れよかつたです。

▼ 『宗教者9条の会』の二ユース、中味が濃かつたです。会の存在は知っていました。

▼ 活動の一端にふれることが出来ました。私が属している『9条の会』でも少し広い取り組みをーと思いました。

▼ 冤罪の被害者から直接お話を伺つたのは、松川事件らしいです。この間どのようにして冤罪がつくられるのか幾つかの事例を聞いてきました。が、当事者としての心構えや、世論、マスコミのことなどあらためて学ぶことができました。河野さんのお人柄に感服いたしました。

▼ 犯罪被害者ご本人のお話を聞き、とても良かったと思えます。マスコミにコントロールされる社会の一員になるまいと思えます。

▼ 怨みを怨みというかたちで返さないという心の広さ、日本中を飛び回っている河野さんに生きるエネルギーをいただききました。世の中のでき

ごとを正しく見、認識することの難しさ、事実を見抜く眼をどう磨いていくのか。生きる支え、人とひとの温かい触れあい・出遇いをいつまでも心に刻みたいと思います。

▼ 今まで私はパッシングする側にいました。この世の中を良くするのも悪くするのも私自身であることを学びました。

▼ 15年前の事件とはとても思えません。さぞかし無念であつたことでしょう。世間から殺人犯としてののしられ、警察当局からは家族の全体が実行犯として扱われていた当時の報道を思い起こします。とてもおそろしいことです。マスコミや警察権力。もし当事者となつたとき私には自信がありません。今でもぬれぎぬで拘留されている人が沢山いるのでしようね。残念なことです。

▼ 穏やかで心の強さを感じました。ひとを恨まないのは自分のためだと仰つていますが、それを実際に行動に移すことはとても難しいことだと思えます。今をよく生きるために、今を大切に生きるという言葉に共感しました。マスコミの報道を鵜呑みにするのはなく、自分で考えることの大切さを感じました。

▼ 正しいこと、していないことはしていないと貫くこと

の大切さを家族とゆつくり話し合いたいと思います。私自身もかつて検察に呼ばれた経験があります。当時の組合が10年以上に亘り私共を支援してくれ、週刊誌も私共の味方をしてくれたということもありました。今とは違い健全な労働運動と、労働組合、そして組織の上部団体などが機能していたからだと思つていま

▼ 警察の公権力や大衆・世論の圧力に屈しなかつた河野さんのことに以前から興味がありました。地に足をしっかりとつけた大きな人間力と、人格をお持ちなのがしつかり認識できました。私の日々の過

ごし方を反省させられました。河野さんを支えてきたまわりの人々の存在を聴きとも嬉しく思いました。生きる勇氣をいただいた感じます。

▼ 裁判員制度もスタートします。事件についての背景をもう一度考えてみたいと思えます。冤罪についても改めて考えました。

▼ 超人的ともいえる強靱な精神力には感服しました。私とその立場になつたときの事を考えると肝が縮み上がりそうです。あれほどの辛苦を体験されたとは思えぬ人格者となつておられることに、とまどいさえ覚えました。私自身もつともつと自分にも世間に

も強くなりたいたいものです。世界平和の希求遺産として憲法9条は日本人の宝物です。▼新聞を見て今日のこの講演を知りました。事件発生以来河野さんのことは常に心にかかっています。マスコミの心ない報道に怒りを感じていましたが、どんなときでもいつも冷静に受け止めておられるお姿に、どうしてこまで冷静に対応できるのだらう。：と主人と話していました。思いがけず河野さんにお目にかかることができ嬉しく思います。▼今日の講演を聞いて、その場その場の判断の鋭さと、オームの人たちに対応できる心の大きさに驚き、頭の下がる思いでした。大きな力を与えられた思いです。▼真実をみきわめることがどれ程難しいのかと言うことが本当によくわかりました。お話を聞きながら、殺された小林多喜二のことが重なり、心が潰れる思いでした。本当によく闘って下さったと思います。心から感謝いたします。▼人を恨むことを止めるという、言うは易く行うは難の最たるものだと思います。メディアによって作られる情報の危うさを改めて感じました。

▼河野義行さん疑惑に対する報道のすべてが、警察の1ク記事であった事を知り、驚いています。戦時中の大本営のことを思い起こし、おそろしい時代が来たと思えます。▼「暮らす・生活する」はギリシャ語でポリテウオー、すなわちポリスの一員として生活することであるといわれます。私たち日本人はほんとうのところ「憲法を生きた」経験があるのだろうか。起草者がわれわれ「国民」であることをどれほどの人が自覚してきたのだろうか。憲法25条「生存権」の事柄が今どれほどの高まりをみせたのであろうか。私たちは「暮らしの問題」であることを確認し、克服の道を探り続けていくべきだと思います。▼できることなら死刑はやめてほしい。警察のすごさ怖さ。疑いの恐さなど全く知らない事についてのお話ばかりでした。権力やメディアに飲み込まれた民衆の恐さなど、後で本をゆつくり読ませて頂きます。▼このほかに30通ほどの感想を頂きました。有り難うございます。紙面の都合で文章の一部を割愛しましたことをお許し下さい。

2008年度宗教者9条の会・大分 会計報告

2008年5月11日～2009年5月18日

【収入】		【単位】 円
会費・カンパ	233,000	
前年度繰越金	- 46,213	
合計	186,787	
【支出】		
公開講座	100,000	講師謝礼等
にゅーす・ちらし発行	72,795	郵送料 48,720 印刷・封筒等 24,075
会議費	2,930	会場費 2,930
合計	175,725	

歳入額 186,787 歳出額 175,725 二年度繰越金 11,062

2008年度宗教者9条の会・大分事業報告

- 08年
 - 7月5日 にゅーす15号発行
 - 7月17日 第8回今を語ろう連続座談会
 - 9月11日 第9回今を語ろう連続座談会
 - 11月20日 第10回今を語ろう連続座談会
 - 11月17日 にゅーす16号発行
 - 11月27日 松居友さんの講演会・交流会
 - 12月14日 世話人会 藤田宏紀さん送別会
 - 2月19日 第11回今を語ろう連続座談会
- 09年
 - 4月1日 にゅーす17号発行
 - 4月14日 第12回今を語ろう連続座談会
 - 5月1日 にゅーす18号発行
 - 5月18日 河野義行講演会・総会

宗教者9条の会・大分事務局
〒879-5102
由布市湯布院町川上 3561
見成寺
TEL 0977-84-2257
FAX 0977-84-5203
年会費 3,000円
郵便振替口座 01720-1-111731

会費・カンパ ども ありがとうございます。
長野義人・長野カヨ子・大原洋子・堤栄三

- 世話人 (◎代表者)
- 無着成恭 曹洞宗 泉福寺
 - 酒迎天信 日本山 妙法寺
 - ◎日野詢城 大谷派 見成寺
 - 林 正道 大谷派 安養寺
 - 西郡 均 本願寺派 誓岸寺
 - 古谷 聡 大谷派 蓮照寺
 - 佐々木淳二 大分メノナイトキリスト教会
 - 掛橋泰定 日蓮宗 妙栄寺
 - 大在 紀 本願寺派 長光寺
 - 野口春夫 日本基督教団津久見教会
 - 永井一匡 アライアンス大分キリスト教会

『今を語ろう』連続談義
この学習会は、公開討論会の形を取りますので多数の参加者を募集し、自由な意見交換を求めます。

第十四回 7月6日(月)3時より
会場 願西寺 大分市今津留2-10-29
電話 097-1558-8430

編集後記
河野さんの講演会には450名が参加。新聞5社による事前の記事が有り難かった。恨むのではなく理解し合うこと、豊かな世界はそこから始まる(詢)河野義行講演録は次号掲載致します。